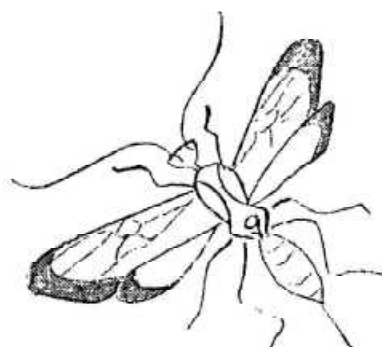


すずむし

Vol. 8 No. 1



倉敷昆虫同好会

May. 1958

目 次

表紙デザイン	近藤 光宏	
○倉敷市福田町産昆虫雑記(二)	船越 俊平	2
☆採集メモ		
○道後山及び帝釈峽	赤枝 一弘	7
○室内に飛込む蝶について	赤枝 一弘	7
○八ヶ岳採集品目録中の一部訂正について	K. F. A.	9
○昆虫採集の用具(その1)	編 集 部	9
○季節の昆虫		
△ムカシトンボ		10
△ウスバシロチョウ	N. T. K.	11
○今年度の採集会予定地について	N. T. K.	12
会 報		
○1958年度採集会予定		13
○5月採集会案内		14
○新入会員		14
○本会宛新着寄贈誌		14
編 集 後 記		15

倉敷市福田町産昆虫雑記(二)

船越 俊平

Ⅲ 半翅類

Familia THYREOCORIDAE ツチカメムシ科

- (1) *Macroscytus japonensis* Scott ツチカメムシ VIII-16 (1953)
古新田

Familia PENTAOMIDAE カメムシ科

- (2) *Dolycoris baccarum* Linné プチヒゲカメムシ VIII-6 (1953) 古新田
(3) *Nezara antennata* Scott アオクサカメムシ VIII-16 (1953) 古新田

Familia CERCOPIDAE アワフキムシ科

- (4) *Aphrophora intermedia* Uhler シロオビアワフキ VI-16 (1953)
石屋谷：たくさん発生する。

Familia CICADIDAE セミ科

- (5) *Platypleura kaemferi* Fabricius ニイニイゼミ 町全域に見られます。
(6) *Graptopsaltria nigrofuscata* Motschulsky アブラゼミ 前種同様
であるが、本種の方が多い。
(7) *Cryptotympana japonensis* Kato クマゼミ 呼松付近及びその東南部の丘陵
帯に見られるが、北部・東部の丘陵帯ではその鳴声を聞いたことがない。

○付記 ミンミンゼミは、福田町内では鳴声を聞いたことがない。全く発生しないのかも知れないが
今後の調査が望まれる。

Familia RICANLIDAE ハゴロモ科

- (8) *Geisha distinctissima* Walker アオバハゴロモ VIII-6 (1953) 石屋
谷：たくさん発生する。

半翅類は、以上たった8種しか書けなかったが、福田町在住当時もっと多くの採集をしておけば
よかったと残念に思っている次第である。

Ⅳ 甲虫類

Familia HYDROPHILIDAE ガムシ科

- (1) *Hydrophilus affinis* Sharp コガムシ VIII-20 (1954), VIII-25
(1952) 東塚
(2) *Sternolophus rufipus* Fabricius ヒメガムシ IX-3 (1953) 東塚
(3) *Enochrus simulans* Sharp VIII-5 (1954) 東塚, VIII-20 (1954) 東塚
(4) *Coelostoma stultum* Walker セマルガムシ VIII-20 (1954),

IX-14 (1953) 東塚

- (5) *Berosus leuisius* トゲバゴマフガムシ VIII-1 (1954), VIII-20 (1954) 東塚 これらガムシ科の大部分のものは燈火に飛来したものである。

Familia SILPHIDAE シデムシ科

- (6) *Nicrophorus japonicus* Harold ヤマトモンシデムシ科 VIII-25 (1952) 水島栄町：燈火に飛来したものか屋内で捕えたものである。
- (7) *Silpha japonica* Motschulsky オオヒラタシデムシ VI-1 (1954) 元古新田

Familia SCARABAEIDAE コガネムシ科

- (8) *Onthophagus viduus* Harold マルエンマコガネ VIII-31 (1952) 東塚
- (9) *Onthophagus lenzii* Harold カドマルエンマコガネ VIII-12 (1953) 東塚：本種と前種は燈火に飛来したものである。
- (10) *Serica* sp IX-25 (1952) 東塚：台風の翌朝に窓枠で得た。 *japonica* Motsch. ピロウドコガネムシのようであるが、はつきりしない。
- (11) *Autoserica castanea* Arrow アカピロウドコガネ VIII-1 (1954) 東塚：VIII-26 (1953), VIII-21 (1953) 水島：燈火に飛来したものである。
- (12) *Melolontha frater* Arrow オオコブキコガネ VIII-2 (1953) 水島栄町：VII-7 (1954) 東塚
- (13) *Dranida albolineata* Motschulsky シロスジコガネ VIII-1 (1954) 東塚
- (14) *Adoretus tenwimaculatus* Waterhouse チャイロコガネ VI-6 (1954) 元古新田
- (15) *Popillia japonica* Newman マメコガネ VI-6 (1954) 元古新田：VI-16 (1953) 水島栄町：ものすごく発生して、ヒメコガネと共に、肥料にするために干してあるのを、農家の庭先で見かけたことがある。
- (16) *Mimela testaceipes* Motschulsky スジコガネ VIII (1954) 東塚
- (17) *Mimela splendens* Gyllenhal コガネムシ VI-6 (1954) 元古新田：VI-16 (1953) 水島栄町
- (18) *Anomala cuprea* Hope フウガネブイブイ IX-14 (1953) 水島栄町
- (19) *Anomala viridana* Kolbe ヤマトアオドウガネ VIII (1954) 東塚
- (20) *Anomala daimiana* Harold サクラコガネ VIII-1 (1954) 東塚
- (21) *Anomala rufocuprea* Motschulsky ヒメコガネ VIII-26~IX 27 (1953~54) 町全域で得ている。
- (22) *Anomala lucens* Ballion ツヤコガネ VIII-1 (1954) 東塚：*Mimela*, *Anomala* の大部分のものは燈火で得たものである。

- (23) *Phyllopertha conspurcata* Harold カタモンコガネ VI-6 (1954)
元古新田
- (24) *Phyllopertha orientalis* Waterhouse セマダラコガネ VI-16
(1953)水島栄町
- (25) *Protaetia brevitarsis* Lewrs シラホシハナムグリ XI-1 (1952)
水島栄町
- (26) *Oxycetonia jucunda* Faldermann コアオハナムグリ XI-27, XI-
28 (1953)元古新田
- (27) *Xylotrupes dichotomus* Linne カブトムシ VII (1954) 東部丘陵帯
(?) : 全部小中学生からもらったものである。
Familia BUPRESTIDAE タマムシ科
- (28) *Chalcophora japonica* Gory ウバタマムシ XI-2 (1952)元古新田
Familia ELATERIDAE コメツキムシ科
- (29) *Lacon parallelus* Lewis コガタノサビキコリ VI-6 (1954)元古新田
- (30) *Alaotypus maklini* Candezc オオサビコメツキ VI-6 (1954)元古
新田
- (31) *Agrypnus albomaculatus* Miwa シラホシサビキコリ VI-6 (1954)
元古新田
- (32) *Alaus berus* Candezc ウバダマコメツキ V-30 (1953)東塚
以上の他に未同定のものを三種採集している。
Familia NITIDULIDAE ケシキスイ科
- (33) *Soronia* sp. VIII-20 (1954)東塚: *japonica* Reitter キマダラケシキスイ
に似ているがはっきりしない。
Familia COCCINELLIDAE テントウムシ科
- (34) *Epilachna sparsa orientalis* Dieke ニジュウヤホシテントウ
VIII (1953)水島栄町
- (35) *Caccinella septempunctata fruckii* Mulsant ナナホシテントウ
VIII-6 (1953)水島栄町
- (36) *Propylaea japonica* Thunberg ヒメカメノコテントウ VI-27 (19
54)水島栄町
lb. lineata Karisaki セスジヒメテントウ VIII-20 (1954)水島栄町
Familia MELOIDAE ツチハンミョウ科
- (37) *Epicauta gorhami* Marseul マメハンミョウ X-10 (1952)東塚
Familia CERAMBYCIDAE カミキリムシ科
- (38) *Leontium viride* Thomson ミドリカミキリ V-5 (1954)水島栄町
: サザンカの葉上で得たように記憶している

- (39) *Chlorophorus annularis* Fabricius タケトラカミキリ VII-3 (1954) 水島栄町
- (40) *Purpuricenus temmincki* Guerin-Meneville ヒカミキリ VI-16 (1953) 元古新田
- (41) *Monochamus alternatus* Hope マツノマダラカミキリ VI-6 (1954) 東塚
- ※(42) *Anoplophora malasiaca* Thomson ゴマダラカミキリ 町内全域から得られる。
- (43) *Batocera lineolata* Chevrolat シロスジカミキリ VII-4 (1954) 東塚
- (44) *Pterolophia annulata* Chevrolat ワモンサビカミキリ IX-27 (1953) 元古新田
- (45) *Oborea japonica* Thunberg リンゴカミキリ V-30 (1954), VI-1 (1953), VI-20 (1954) 水島栄町
Familia CHRYSOMELIDAE ハムシ科
- (46) *Donacia provosti* Fairmaire イネネグイハムシ VIII-5 (1954) 元古新田
- (47) *Cryptocephalus approximatus* Baly バラルリサルムシ VI-6 (1954) 水島栄町
- (48) *Chrysolina aurichalcea* Mannerheim ヨモギハムシ VIII-28 (1952) 元古新田
- (49) *Aulacophora femoralis* Motschulsky ウリハムシ VIII-6 (1952) 水島栄町：町全域に多数発生する。
Familia ATTELABIDAE オトシグミ科
- (50) *Rhynchites heros* Roelofs モモチョッキリ V-5 (1954) 水島栄町
Familia CURCULIONIDAE ソウムシ科
- (51) *Sympiezomias lewisi* Roelofs ワモンヒョウタンゾウ VI-6 (1954) (福田町内)
- (52) *Scepticus tigrinus* Roelofs スナムグリヒョウタンゾウ VI-6 (1954) (福田町内)
- (53) *Sitophilus oryzae* Linné コクゾウムシ VI-27 (1954) 水島栄町 以上の他、水島栄町でヒョウタンゾウ一種 VI-27 (1954) を得ている。
- ※(54) Familia LAMPYRIDAE ホタル科
- (54) *Luciola* sp. ；発生期に入ると、かなり発生する。本町内に発生するのはかなり大型のもので、多分 *cruciata* Motschulsky グンシボタルと思われる。北畝から南畝へ出る通称三間川なる用水で、子供の頃よく追ったものであるが、最近は採りに行ったことが

ないので種名は確実でない。

Familia DYTISCIDAE ゲンゴロウ科

- (53) *Cybister lewisianus* Sharp マルコガタノゲンゴロウ X-10(1952)東塚
 (54) *Rantus pulverosus* Stephens ヒメゲンゴロウ VIII-5(1954), IX/4(1953)東塚
 (57) *Laccophilus sharpi* Regimbart アヤナミワゲンゴロウ VII-1(1954), VIII-20(1954)東塚 以上三種は、全部燈火に飛来したものである。

Familia CICINDELIDAE ハンミョウ科

- (58) *Cicindela elisae* Motschulsky ヒメハンミョウ VIII-3/(1954)水島栄町 なおC, *japonica* Thunberg ハンミョウは、未だ本町内で採集したことがないが、南に接する児島市通仙園で1953年に得たことがあるので広江付近には産するのではないかと思われる。

Familia CARABIDAE オサムシ科

- (59) *Campalita chinense* Kirby エゾカタヒロオサムシ IX-14(1953)水島栄町：本種は既に報告したものであるが再録しておく。
 (60) *Omophron limbatum aequalis* Morawitz カワラゴミムシ VIII-5(1954)東塚

Familia SCARITIDAE ヒョウタンゴミムシ科

- (61) *Scarites terricola pacificus* Bates ナガヒョウタンゴミムシ IX-3(1952)元古新田；X-3(1953)水島栄町

Familia BRACHINIDA ホソクビゴミムシ科

- ※(62) *Pheropsophus jessoensis* Morawitz ミイデラゴミムシ 本町内に多数産する。

Familia HARPALIDAE ゴミムシ科

- (63) *Peryphus morawitzi* Csiki ヨツボシミスギワゴミムシ VII-1(1954)東塚
 (64) *Ophonus* sp. (*tschiliensis gebieni* Schabinger?) IX-14(1953)水島栄町
 (65) *Dolichus halensis* Schaller セアカゴミムシ
 f. *echalensis* Teannel VIII-7(1954)水島栄町
 f. *flavicornis* Fabricius IX/4(1953)水島栄町
 (66) *Anisodactylus signatus panzer* ゴミムシ VII-1(1954), IX/4(1953)東塚
 (67) *Stenolophus iridicolor* Redtenbacher ニジツヤゴモクムシ VII-1(1954), VIII-20(1954)東塚

(6) *Chlaenius inops* Chaudoir ヒメキベリアオオゴミムシ IX/4 (1953)
東塚

以上68種の甲虫を、とりまとめ採集の日時と場所を記録しておく。何かの資料になれば幸いである、なお番号前に※印を付したものは現佐手許にない標本である。

本稿1脚類及び(2)類にかかげた地名のうち古新田と記したものは全部「元古新田」に訂正する。

採 集 メ モ

道 後 山 及 び 帝 釈 峽

赤 枝 一 弘

本年筆者は大森君等と共に吉備高原の見学調査の一端としての当地の実地見学(岡大教育地理教室)に参加して若干の採集をこころみた。その時の採集品の内種名の判名したもののみ簡単に列記しておきます。

7月23日、道後山着、天候非常に悪く雨が降ったりやんだり、道後駅よりバスで行きふもとで下車、そのあたりでカラスアゲハ(目)ヒヨウモンエダシヤク、この種は多い。トラガ、休息時に道からそれて横道へ入る、一面のヒメシオンの白い花が咲いている中をヒヨウモンが飛んでいるのを採集して見るとウラギン、オオウラギンスジ(筆者2大森2)トラフ(大森)、ヘリグロチャバネ等を探る。一行は70人以上いるのが半数以上ハソマーを持ちそれが岩をくずして行くのであるから壮観である。以然として雨が降ったり止んだり、オオヒカゲ(目)(大森)山の家付近はウラギンヒヨウモンが多い。

24日 割合天気がよい、セフィルスを期待したがミズイロオナガ、ジョウザンミドリばかり、ついにオオヒカゲを採集する。新湯産の標本は見なれているが中国産を見るのは初めて、ずっと濃色である。ヒメキマダラセセリを採り、頂上の牛糞をつつきコエンマ、カドマルエンマ、オオマグソ等を探る。午後からは帝釈へ出たがここでは割に大したもの探れず湖水の上を飛ぶミヤマカワトンボが印象的であつた程度。

その採集品、ヒロードカミキリ、ベニシタヒトリ、シロシタボタル、其は種名不明がまだ大分ある蜻蛉はミヤマアカネ、マユクテアカネ、オニヤンマ等の普通種ばかり。

室内に飛込む蝶について

赤 枝 一 弘

この問題は筆者が高校時代に問題にしたのであるが某氏に単なる個体数に比例するだけであると言われ今日までは引込めていた。その間文献にも注意したがついに、そんな文献を見る事は出来なかつた。しかし諸兄の御批判を受けるためにあえて発表さしていただく。

皆さんも家、あるいは校舎内へ飛込んでバタバタもがいている蝶を見られたことがあると思います。筆者も漠然と見ていましたが、不思議なことにクロアゲハはよく飛込むにもかかわらずそれより個体数の多いアゲハが室内へ飛込んだのは今日まで見たことがない点であります。クロアゲハは筆者の家へ

もすでに2、3度飛込みました。友人の家へ入ったのも、もらいました。西高に於ても在学中におそらく10以上も見ました。それで難なくクロアゲハを探ったものです。大学生になってからも昨年同じ日に2頭のクロアゲハが室内でバタバタやっているのを見ました。しかるにアゲハは未だ見ておりません。この問題をどう考えられますか。筆者の今の考えではクロアゲハがアゲハより陰性なためではないかと思っているのですが、どんなものでしょう。陰性だからと言う理由の裏付けとしては、ジャノメチョウ科の蝶がよく入る事です。もともとジャノメチョウ科の蝶は個体数も多いです。後に筆者が1954, 9. 3~9. 18. の15日間西高の体育館の2階に於て行ったジャノメチョウ科の調査のメモを上げますとヒメジャノメ20頭ヒカゲ2, ヒメウラナミ1, でヒメジャノメが圧倒的です。これは筆者一人が一日一回数えた数だし日曜は入っていない。とにかく相当な数である。ヒメジャノメが多かったのは発生期の関係もあるし、ヒカゲはより森林性であるし、ヒメウラメミも山間の草地に多いから高校の校庭に校庭にまで来ないことも関係すると思われまふ。しかし一般にジャノメチョウ科は多くそれに次ぐのはセセリチョウ科である。セセリチョウは陽性であるがその飛翔が急である関係で多く飛込むのではなからうか、中でもイチモンジセセリが多いのは個体数の関係であろう。その他で入っているのを観察した蝶ではキチョウ、ツバメシジミ、クロツバメ、ヤマト、オオチャバネセセリ、イチモンジチョウ、コミスジ、である。モンシロチョウは観察していない。しかし、上記の記録はセセリチョウ科を除いていずれも1~2の記録である、参考に蝶の記録をおげるとコスズメ、キイロスズメ、ヒメホウジャク、ホシホウジャク、オオスカシバ、はよく入っている。シモフリスズメ、ヤスジスズメは時に、その他トモエガ、終期にはフクラスズメがよく入っている。以上のごとくスズメガの仲間が圧倒的である。しかも半数は夜間活動性である。この体育館が夜間に電燈をつけるなら燈火飛来も考えられるが、所が夜間燈はともさない。またホウジャク類、スカシバは昼間活動性である。筆者の考えではこれはやはりセセリチョウ科と同様のその突進的飛翔方法に思ふ。とにかく上記の様に筆者にもちよつと一貫性がたたず、ややこしくなつて来ましたが結論的に言えばよく飛込む蝶及び蛾はクロアゲハ、ヒメジャノメ、イチモンジセセリ、コスズメ、ヒメホウジャク、ホシホウジャク、それにつくものがヒカゲ、ヒメウラナミ、キイロスズメ、トモエ、オオスカシバ、オオチャバネ等でその他の種はめつたに入らぬ事です。これは略略に於けるカトリヤンマの例を考えれば一そう個体数だけの問題ではないことがはっきりすると思ふ、御承知のようにカトリヤンマは夕方非常によく室内へ飛込んでくる。

特にわれわれが夏休が終つて学校へ行くと休期間に廊下へ飛込み出られなかつた、おびたしい個体が死骸を横たえているのを見たものです、他のトンボに於いてはほとんど見られぬことです。これもカトリヤンマの陰性(負の走光性)がなすわざではないのでしょうか。上記の鱗翅目の例も生理学的に明らかに出来ないでしょうか、このような観察は特殊条件でないと思ふのですが、教員の方、学生の方は比較的機会にめぐまれているのですから資料及び御批判をお願いいたします。

八ヶ岳採集品目録中の一部訂正について

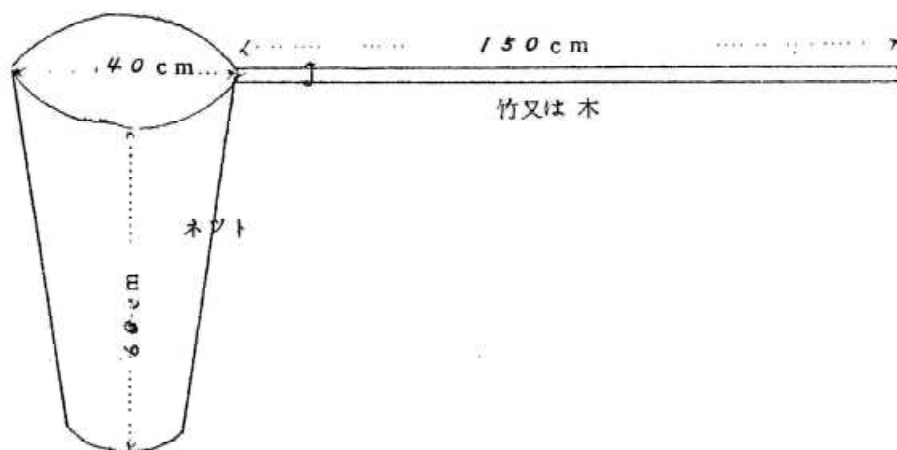
本記7(4)に記載した甲虫若干について、次のごとく訂正する。

- (1) *Macrodorcas rectus motschulsky* コクワガタは *m. stripennis* Motschulky スジクワガタに
- (2) *propylaea japonica* Thunberg ヒメカメノコテントウは、
P. quatuordecimpunctata Linne コカメノコテントウに、
- (3) *Pidonia puziloi* Solsky フタオビノミハナカミキリは、*P. quadermaculata* Matsushita マツシタノミハナカミキリに、
- (4) *Pseudopyrachroa vestiflua* Lewis アカハネムシは、*Pseudodendroides niponensis* Lewis オオクシビロウドムシに、 (K. F. A.)

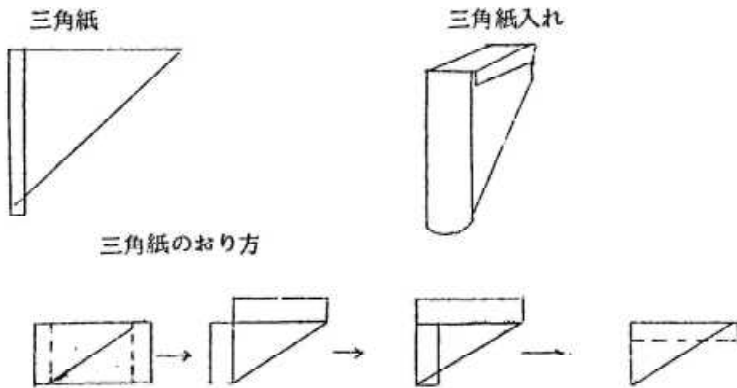
昆虫採集の用具(その1)

小学生のおちいさいみなさん こんにちは、新しい学期になって、はやくも一カ月たちました。その間に山は、あるいは私達をとりまく庭のすみずみまで、すっかり緑色に化し、自然は両手を開いてまぢかまえているようです。先日、倉敷市の写生大会へ行きましたがここは、すずむしにとって古里といつてよくなじまれて来たところですが、今はツツジに明るくなった山はだを、真黒の翼をひらめかせて頭上をかすめて飛ぶ蝶・・・それを見て、網をかまえて心をとぎめかせた、皆さんのところが急になつかしまれてまいりました。これから夏にかけて昆虫の世界は、いっそう活発になります。学校のクラブで、ピクニックのついでに、あるいは各自で色々昆虫を採集する機会も多くなることでしょう。そこで採集にぜひ必要と思われる用具について図解してみました。

◎ 捕虫網



◎ 三角紙及び三角紙入れ

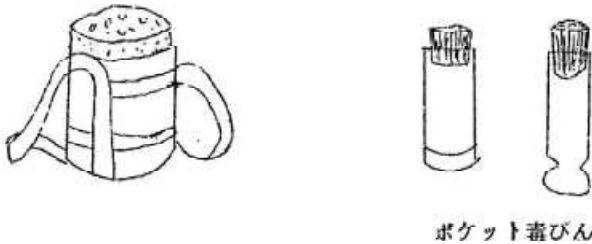


三角紙はリュウサン紙を用うとよい

三角紙を使うのは、蝶や蛾のなかまで、毒びんに入れると、あばれて他の虫とふれあい、はねの大切なウロコがとれてしまうからです。一まいの三角紙に一匹の蝶をはねをあわせていれます。

◎ 毒びん

コルクのふた



ポケット毒びん

その他にピンセット、注射器及び殺虫液、採集箱などがあり、便利がよいことがあります。

季節の昆虫

ムカシトンボ

ムカシトンボは名前の様に大昔に住んでいたトンボの類で現在ヨーロッパではその化石丈しか産しない珍しい種類です。日本では各地に産しますが数は比較的少く、岡山県では珍種に属し、現在迄に記録されている所は真庭郡の「神庭の滝」と阿智峡つ桐掛の滝」の2カ所丈でそれも最近探集されていません。幼虫は山間の溪流に住み幼虫の期間は7、8年もかかるとも考えられています。成虫は5月頃に発生して一見小形のヤンマに似ていますが翅脈はイトトンボの類に良く似ており、溪流の上を飛翔しますが飛び方が速いので見つけ難く又採り難い種類です、まだまだ他の場所でも発見される可能性が有りますから採集に出掛た時には目を皿の様に良く探して見て下さい、もし採集

した人がありましたら本誌「おとしぶみ」の欄で是非発表する様に願います。

ウスバシロチョウ

可憐で清そな田舎者

5月になると若くて多彩な緑が山野をおおい、県北ではウスバシロチョウが現われるようになる。薄いナイロンの様に半ばすきとおる白い翅を持ち、ゆるやかな飛び方で山間の草花を訪れるこの蝶は、清そのものであり、蝶愛好家にも好感を持たれているようだ。

現在日本には、それぞれ1935年と1936年に記録されたきりで、その後採集されたことのないオオアカボシウスバシロチョウとエゾアカボシウスバシロチョウを除けば、ウスバシロチョウ類は3種が住んでいることになる。ウスバシロチョウ、ヒメウスバシロチョウ、ウスバキチョウがそれだ。ところが、ウスバシロチョウの種名 *glacialis* (氷のという意味) が示すように、この類は寒冷な地域と関係があり、本場はパミール、カシミールなど中央アジアの高地である。北半球には広くウスバシロチョウ類が30種類も分布しているが、中央アジアの高地には20種近い、色々のウスバシロチョウが住んでいるという。だから、岡山県にもいる *Parnassius glacialis* Butler, 1866ウスバシロチョウは都会から遠くはなれて静かな生活を続けている田舎者ということになる。可憐で清な田舎者だ。

装飾的な習性

田舎者とはいも、雄は交尾の時、都会者なみの流儀を決して知らないわけではない。本場の同類と同じように、ウスバシロチョウの雄も交尾の終る少し前には、盛んに尻の先を動かして特別の粘液を出しながら、自分の膜尻を混ぜて雌の腹面に封印を作り上げる。交尾後付属物と呼ばれるふくら状の封印だ。これを作られた雌は固く貞節を守らされ、二度と他の雄と結はれることがない。

ところで雌はどうなのであろう。都会者というわけではないが、ヨーロッパのアポロウスバシロチョウや、ソ連のクロホシウスバシロチョウは後翅と後肢をすり合わせて発音する。ソ連のモスコウの東方草原で観察されたクロホシウスバシロチョウの例では発音するものは、必ず交尾の終つた雌だといから発音は雌の特権らしい。日本のウスバシロチョウは発音の流儀を知っているのだろうか。

低温の好きな幼虫

交尾を終えた雌はやがて、卵の成熟を待つて、幼虫の食草ムラサキケマンの繁茂する樹かげのくさむらの間へもぐり込み、地表の細い枯枝の下面に数個ずつ産卵する。間もなく卵内で胚子が發育するが、幼虫はそのまま卵内に留って暑い夏を耐えて、秋を過して1、2月の寒い時期に卵より脱出し、食草の芽ばえを見つけて少しずつ食っていく春暖と共にムラサキケマンは息に増し、ウスバシロチョウ幼虫も目に見えて大きくなっていく、食事の時にはムラサキケマンに登り、食を終ると草から降りて枯葉の上に静止して日光を浴び、あるときは堆葉の間にかくれる。ある日、成熟しきつた幼虫は枯葉、枯草などを糸で綴り、薄いまゆを作ってその中で蛹になる。特に石稜の隙間にかくれて化することを好む。こうして、さわやかな5月の朝、天女のような装いも新しく、若いウスバシロチョウが蛹のからを破って出て来るのである。

まだまだ少ない県下の分布資料

さて、岡山県ではウスバシロチョウは残念ながら県北に住んでいるのみで、県南に発生地はないようだ。彼らに接するためには、県北の山地を歩いて見なければならぬだろう。しかし一口に県北といっても広い、どこを歩けばよいのか。

昭和5年、天皇陛下の行幸に際して県下の学徒を広く動員、大々的に行われた調査に基く岡山県内生物目録(1930年11月10日発行)によれば県内での分布は北部一円と示されており、凡例で北部とは津山・英田・勝田・苫田・久米・真庭・吉備・後月・川上・上房・阿哲の7市10郡をさすことが示されているが、あまり表現が簡単過ぎて、このままだとウスバシロチョウは普遍的なモンシロチョウと同様、県北ではどこにでも見られるのかということになってしまう。ただ献上品に選定された標本が阿哲郡新見町産のものであることを示しているのが参考になるくらいだ。その後、1939年には「虫の世界」3(1-2)へ平田信夫が岡山県産蝶類目録を発表、ウスバシロチョウの記録も見えるが友人、林が新見で採集・・・と同じく新見が産地として登場しているのみ。同じ年、岡山県の片山章なる同好者が「虫の世界」3(5,6)へ我が郷土の蝶類目録というものを発表、ウスバシロチョウの項では、小生も本年5月23日に1匹飛翔中のものを採集したと記してあるが、どこで採集したものかさっぱりわからない。

ウスバシロチョウは県北に広く分布するが局地的に点々としていることがはつきり打出されたのは1946年に岡山博物同好会会報予報1に載った小坂和彦の岡山県産蝶類目録が最初であろうか。この目録には、北、最北に分布し、産地が限定されることが示されている。(ここにいう北、最北とは、高梁、金川、周匡を結ぶ線以北をさすことが前書に記されている。)ただし、詳細な発生地については全然ふれていない。

1950年代になつてからは、比較的詳細な分布報告が見られるようになったが、現在迄に発表された分布地は、真庭郡勝山町神庭、勝田郡那岐山、英田郡美作町林野、苫田郡上斎原村、奥津村等であり、まだまだ、ウスバシロチョウ分布に関する資料は少ないようだ。

結局、現在では、既に分っている分布地へウスバシロチョウをたづねて行くのもよいが、新しい生活場所を探し求めて歩くことの方に、より大きなたのしみがあるというものだろう。(N. T. K.)

今年度の採集会予定地について

休眠的な冬が過ぎ、再び春になると、いつものように、われわれは虫を求めて野や山の採集地のことを考える。幾回となく訪れた採集地へ また今年も足を運ぶのもいい。過去の思い出と再会出来るし、その上に立つ新しい事実に驚くことも出来るから。しかし、それにも増して新鮮さに満ちあふれている未知の世界は、われわれを魅了する。今までによく知られた採集地よりも、同好者のまだ踏入れていない土地へ行ってみたいという声が出るのも当然な話だ。新しい土地での知見は、当然のこととして予測を許さぬものが混り得るし、例え予想されていたものであつても、われわれの探究心を満足させるに充分なものがある。そういう点で7月下旬に予定されている県北調査止石見から嶽山方面へ向けての採集行は、種々の点で困難は予想されるが、すこぶる関心をよぶ計画だ。キャンピングを

種々の点で困難は予想されるが、すこぶる関心をよぶ計画だ。キャンプを伴う採集会計画は今年が最初であるだけに、是非とも実現させたいものだ。数日ないし1週間の日程を要し、当然有志のみを募ることにならうが、闘志に消れた方の参加を今から期待して置きたい。

5月採集会で計画されている備中神代方面も、まだ未知の方に属する点で興味が持てる。以前、付近の上市町には本会員の高谷東平氏が居住せられ、ソウムンを主として、相当の活躍はしておられたが、多くの知見はほとんど発表されていないようだ。清らかに流れる高梁川支流の西川、それを取り巻く周囲の山々の広葉樹の豊かさ、しかも付近の新見におけるウスバシロチョウの記録、下流の鬼女洞におけるニッキキンカメムシの記録、あるいは絹掛庵におけるムカシトンボの記録、そういったものが、備中神代、石蟹間の採集行に大きな期待を投げかける。

6月に計画されている浅口郡の遙照山は未知という点では問題にならない。既に何回か同好者によって採集が試みられ、断片的ながら紹介されてきたからだ。ヒメヒカゲやヒョウモンモドキが多産することは既知のことであり、金光として報ぜられたクワジミも、この山のものかも知れない。しかし最近の状況については消息が明らかでない。時の流れは遙照山に住む昆虫を替えているかも知れない。

8月・10月採集会の道後山、高清水高原は、楽な気持ちで山を楽しんで来よう。山があまりにも美しいから。コーラスを響かそう。お互いをもっとよく知ろう。その上に新知見でも得られれば、それにこしたことはないではないか (N. T. K.)

会 報

1958年度採集会予定

今年はスタートがやや遅れましたが、できるだけ今まで、あまり試みられていない場所、しかも昆虫の多く居そうなところを際がして、次のような案をまとめてみました。詳細は別にまたお伝えしたいと思いますが、できるだけ多くの方が参加されますよう希望いたします。

5月25日	備中神代、石蟹間
6月22日	浅口郡遙照山
7月下旬	県北山脈地帯 上石見から東進
8月16・17日	道後山
10月19日	吉田郡高清水高原

5 月 採 集 会 案 内

新緑の5月は阿哲峯の北部、備中神代から西川に沿って石蟹に至るコースを歩いてみることにしました。そこにどんな昆虫が生活しているか、まだよく知られていないので非常に興味深いところです。西川に沿った道は廻りくねって備中神代から石蟹まで13 Kmは、あろうと思われ、足に自信のない方にはつらいかも知れませんが健脚家にとっては、一日、大いに楽しめることでしょう。多数の方の参加を期待いたします。

日 程 5月25日(日) (雨天中止)

伯 備 線				伯 備 線			
5.08発	5.32	7.25	7.38	徒歩(採集)	16.22	18.08	18.31
岡山	倉敷	新見	備中神代		石蟹	倉敷	岡山

本 会 宛 新 着 寄 贈 誌

1. 蜻蛉 I(1) P. 13 : 1957 蜻蛉同好会
2. 蛾類同志会通信11 P. 15 : 1957 蛾類同志会
3. INSECT インセクト8(3~4) P. 48 : 1957 昆虫愛好会
4. 駿河の昆虫19 P. 27 : 1957 静岡昆虫同好会
5. 駿河の昆虫20 P. 21 : 1957 静岡昆虫同好会
6. 世界の昆虫展 P. 32 : 1957 陸水社
7. オオムラサキ絵葉書雄雌2枚 : 1957 陸水社
8. 円波 昆虫3 P. 15 : 1957 安江安記
9. TINEA 4(1) P. 59 : 1958 蛾類同志会
10. OdoNATA. 4 P. 6 : 1958 蜻蛉同好会
11. 動物分類学会会務報告16 P. 11 : 1957 高島春雄
12. 生物クラブ報告1 P. 26 : 1957 鳥取県立倉吉東高校生物クラブ

<p>理化学器機・光学器機 度量衡・計量器・採集用具</p> <p>平田光学器機店</p> <p>岡山市中之町27 電話 ㊟5474</p>	<p>テレビ化学コーダ器機 生物・地学標本模型 昆虫採集用具 テレビ・ラジオ・真空管 島津製作所岡山県代理店</p> <p>サカ工商会</p> <p>倉敷市栄町【赤木病院西】電話913</p>
<p>昆虫・植物採集用具 理化学器機</p> <p>岡山市西中山下【柳川交叉点東】</p> <p>永瀬教育堂</p> <p>電話 ㊟4725</p>	<p>新刊警籍・雑誌・文具</p> <p>愛文社書店</p> <p>倉敷市阿知町 TEL. 126</p>

編 集 後 記

5月の微風が頬をなでる頃となりましたが、今年はずっとより5月雨が多いようで、野外での活躍が抑制されがちです。

さて、やっと新たな装いの1号を皆様のお手元にお届けすることができました。毎号のように遅れのおおびを申し上げなければならないようで、本当に申し訳ありません。恐縮しています。

今月号には、新しいこころみとしまして、殊にジュニアの方々のために編集部で、ほんの申訳的なものですが解説のページを設けました。最近年少の方の御入会があるようですので、そういった方々に多少でも御役にたては幸いです。“すずむし”がもっと私達と緊密なつながりを持った機関誌となるためにも、更に多くの方々からの御投稿をお待ちしています。

すずむし第8巻第1号	昭和33年5月15日 印刷
	昭和33年5月15日 発行
編集兼	岡山大学大原農業生物研究所
発行者	害虫部第2研究室内 倉敷昆虫同好会
印刷所	倉敷市川西町 白洋社